小田実全集〔評論　第６巻〕

義務としての旅

講談社

小田実全集

Makoto Oda

「十三の星の星条旗」が、ある晴れた冬の日の朝、ホワイト・ハウスのまえにひるがえった。

サイゴンでの非暴力行動のあと、日本に来たアメリカ人たちは、私たち（ベ平連)のデモに加わった。右から、Ａ．Ｊ．マスティ、筆者、作家のバーバラ・デミング、学生のシャーロット・サーバー。Ａ．Ｊ．マスティは、アメリカこそが、今、世界の良心の助力を必要としていると説いた。のち、一年たたないあいだに、八十一歳のマスティは不帰の人となった。私たちは、月に一度の定例デモに彼の写真をかかげて東京の街を歩いた。

MESSAGE from JAPAN TO AMERICAN SOLDIERS

Let's Stop and Think

How we wish we could meet you under different circumstances!

In 1931, our Government launched an undeclared war against China, disguising it under the name of the Manchurian Incident. Few people realized then that it was the beginning of the Second World War.

Now in 1968, we feel that another undeclared war going on in Asia, may turn out to be the beginning of World War III.

According to polls conducted by the Japanese newspapers, more than 80 per cent of the Japanese people are opposed to the U.S. policy of war in Vietnam.

The politics of Vietnam should be left to the people living there. Whatever type of government the Vietnamese people may choose, the Americans have no right to interfere.

This war as it goes on in Vietnam belies the American tradition of democracy. It belies the words of the Declaration of Independence which marked the founding of the United States of America as an independent state. At the same time, we are heartened by the news of the three American soldiers in Fort Hood who refused to take part in the Vietnam War and preferred imprisonment to fighting.

Give some thought to this

(Continued on Page 2)

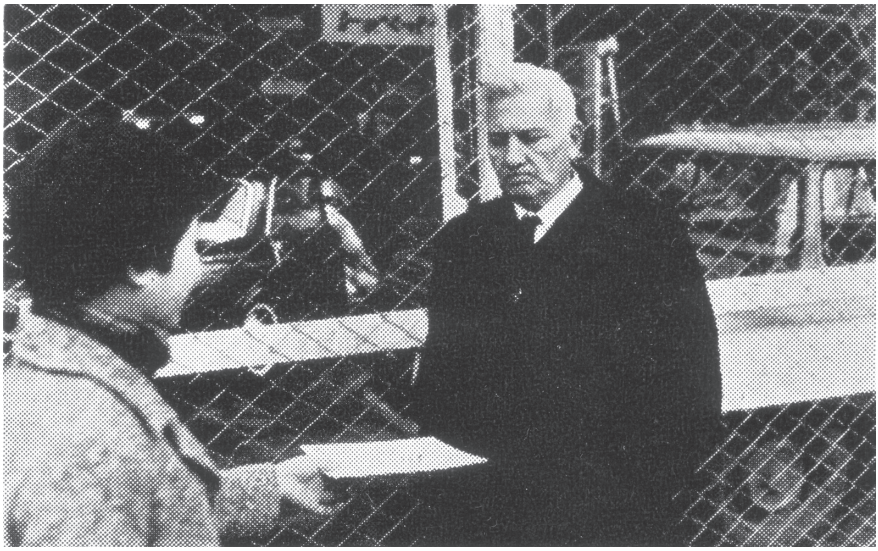
Japanese Fear, Critical of U.S. Vietnam Policy

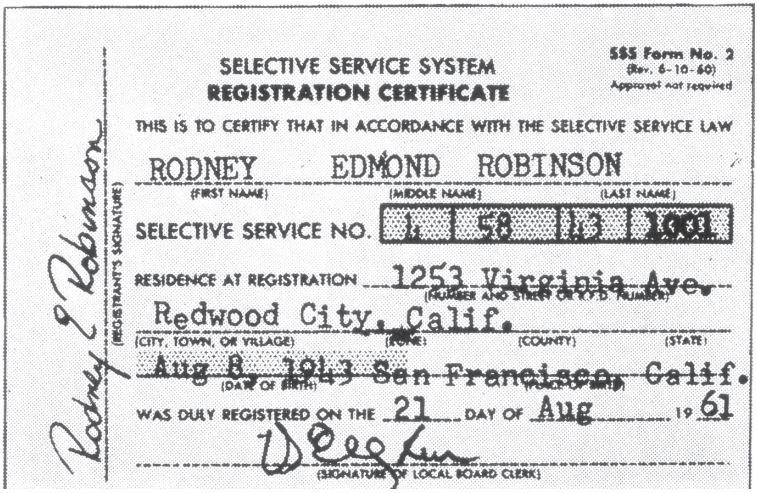
Do you know that the overwhelming majority of the Japanese people are opposed to your policy toward Vietnam? A public opinion survey held last year by the nation's leading daily, Mainichi Shimbun indicated that 46 per cent of the people asked what the initial step should be for settlement of Vietnam said definitely that it was cessation of bombing of North Vietnam by the United States. Another 40 per cent were of the opinion that the first step should be withdrawal of American troops from Vietnam, while only 4 per cent believed that a ceasefire by Viet Cong should come first. None supported intensified bombing of North Vietnam.

In February this year, the National Broadcasting Corporation conducted a nationwide opinion poll on issues of peace and war, and it turned out that only 27 per cent favored the idea of Japan remaining an ally of

(Continued on Page 4)

横須賀で英文パンフレットをまく。「日本からアメリカ兵士へのメッセージ」。幾人もが破り、火をつけた。その一枚。





SELECTIVE SERVICE SYSTEM
REGISTRATION CERTIFICATE

SSS Form No. 2 (Rev. 6-10-60) Approval not required

THIS IS TO CERTIFY THAT IN ACCORDANCE WITH THE SELECTIVE SERVICE LAW

RODNEY (FIRST NAME) EDMOND (MIDDLE NAME) ROBINSON (LAST NAME)

SELECTIVE SERVICE NO. 1 58 16 1983

RESIDENCE AT REGISTRATION 1253 Virginia Ave. (NUMBER AND STREET OR R.F.D. NUMBER)

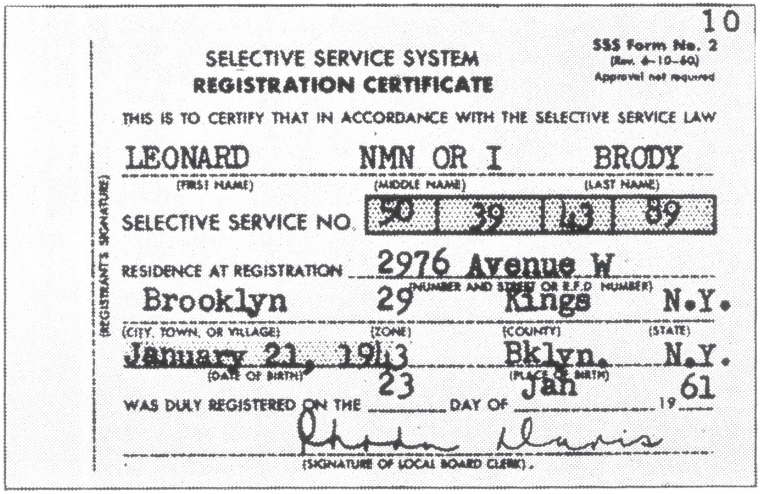
Redwood City, Calif. (CITY, TOWN, OR VILLAGE) (ZONE) (COUNTY) (STATE)

Aug 8, 1943 (DATE OF BIRTH) San Francisco, Calif. (PLACE OF BIRTH)

WAS DULY REGISTERED ON THE 21 DAY OF Aug 1961

(SIGNATURE OF LOCAL BOARD CLERK)

Rodney E Robinson (REGISTRANT'S SIGNATURE)



10

SELECTIVE SERVICE SYSTEM
REGISTRATION CERTIFICATE

SSS Form No. 2 (Rev. 6-10-60) Approval not required

THIS IS TO CERTIFY THAT IN ACCORDANCE WITH THE SELECTIVE SERVICE LAW

LEONARD (FIRST NAME) NMN OR I (MIDDLE NAME) BRODY (LAST NAME)

SELECTIVE SERVICE NO. 50 39 13 69

RESIDENCE AT REGISTRATION 2976 Avenue W (NUMBER AND STREET OR R.F.D. NUMBER)

Brooklyn (CITY, TOWN, OR VILLAGE) 29 (ZONE) Kings (COUNTY) N.Y. (STATE)

January 21, 1943 (DATE OF BIRTH) Bklyn. N.Y. (PLACE OF BIRTH)

WAS DULY REGISTERED ON THE 23 DAY OF Jan 1961

(SIGNATURE OF LOCAL BOARD CLERK)

(REGISTRANT'S SIGNATURE)

しかし、同じアメリカ人のなかにも、その「メッセージ」にではなく、自らの「徴兵カード」に火をつけようとする人たちもいる。そうした数多くの若者のうち、二人が、日本人の手で火をつけて欲しいと「徴兵カード」を送って来た。「日本人諸君が、この怖るべき戦争に反対して同様の行動をとられることを期待して」という手紙とともに。

はじめに

この『義務としての旅』を旅行記と言っていいものかどうか、私は自分で疑問に思う。それよりは、むしろ、一人の日本人であり、文学者である私が、いや、現代の世界に生きる一人の人間としての私が、ベトナム戦争をどのように受けとめ、そこで何を考え、何をしようとして来たかの記録である。いや、そんなふうに言いきってしまっては、まだまだ、美辞麗句すぎる。ほんとうはこれはそんなにみごとな記録でもなんでもなくて、私がベトナム戦争という途方もない悪をどのように受けとめかねているか、私がそこで何かを考え、何かをしようとしたとしても、それは、つまり、受けとめかねている私の苦しみの直接の反映にすぎないので、ここに一冊の書物のかたちで私がさし出そうとするのは、その苦しみの一つの中間報告である——そんなふうに言ったほうが正確だし、私の気持にそくしている。

これまで、私は何度かベトナム戦争は私への挑戦だと述べたことがある。他人にむかってよりも、むしろ、私は自分にそんなふうにくり返して述べて来たのだろう。ものごころついて以来、ということは私の場合戦争末期から戦後二二年のあいだにかけてということだが、私が獲得して来たさまざまな信条、原理、価値に対する挑戦として、たしかに、ベトナム戦争は私のまえに立ちはだかって来た。

たとえば、それは戦争体験を基礎にした私の反戦と平和の原理への挑戦であるのだろう。また、それは、私の民主主義の信条をまっこうから打ちくだこうとする。自決、独立、自由、そういった私が

私の生活と思想のよりどころとして来た価値を無視し去ろうとする。そして、より根本的には、生命の尊厳への挑戦。

私のベトナム反戦運動の出発点は、それゆえ、まず、自分だった。自己中心的にすぎたかも知れない。しかし、六五年四月、今日「ベ平連」という名で世に知られる「《ベトナムに平和を!》市民連合」の運動を始めたとき、私は正直言って、自分から出発するよりほかに道はなかった。その運動の過程で、私は「義務としての旅」に出かけた。三度、私は日本を離れる旅に出て、さまざまな経験、発見、行動への計画とともに、もどかしさをもち帰った。もどかしさは、自分とベトナムとのあいだに横たわる距離に対するもどかしさであり、その距離をどのようにしてちぢめることができるか——そのことが、私の思想と行動の底に、この二年のあいだ、私がたえまなくむきあうべき問題としてあったように思う。そして、おそらく、私がこの本のなかで種々雑多なかたちで述べようとしたことも、結局、その一つのことにほかならないのだろう。書きながらも、たえまなく、もどかしさを感じていたのだから。

＊　＊　＊

三度の旅の最初は、六五年九月から翌年四月まで、ミシガン大学で開かれたベトナム反戦の国際集会に出たのを皮切りに、アメリカ、ソ連、ヨーロッパ、インドをまわった。

二度目は、六六年六月から七月、ジュネーブで開かれた世界平和評議会に出席したあと、ヨーロッ

パを歩いた。

三度目は、ソ連。六六年九月、バクーで開かれたベトナム人民支援の作家の集会に出た。

私は、この本の文章を、一年という時間のひろがりのなかで、つまり、戦争のエスカレイションと運動の深化、多様化、拡大のなかで書いた。各章の文章自体がよくそれを示していると思う。雑誌『世界』が、その都度、一章ごとに掲載したが（Ⅰ――六六年四月。Ⅱ――六六年六月。Ⅲ――六六年七月。Ⅳ――六六年一二月。Ⅴ――六七年一月。Ⅵ――六七年三月）、本のかたちにまとめるにあたって、かなり書き加え、書きなおした。

この本のために、そして、「義務としての旅」に、直接、間接に力を貸しあたえてくれた多くの人々に感謝しなければならない。人々の国籍、民族の別はさまざまだが、たいていが、私とそのもどかしさを共有していた。

もう一つつけ加えるなら、私はここ二年、ベトナム戦争と平和の問題について、より直接的なかたちでいくつか文章を書き、大部分を『平和をつくる原理』（講談社）におさめた。あわせて読んでいただけると幸いである。

――1967年8月2日――

目次

Ⅰ　十三の星の星条旗　13
Ⅱ　切り離し、荷担する　35
Ⅲ　二つの戦争のあいだで　65
Ⅳ　さまざまな国のさまざまな叫び　91
Ⅴ　見る眼と見返す眼　115
Ⅵ　「しかし……」からの出発　141

義務としての旅

I　十三の星の星条旗

私は、たしかに、どこかで、その旗を見たように思う。たぶん、博物館かどこかであったのだろう。どうせ、ガラス箱のなかに入っていて、薄ぐらくて、カビくさくて、そして、ぎょうぎょうしい文句でもそえられていたにちがいない。私はその文句を記憶していない。それとも、アメリカの歴史の教科書のなかだったか。アメリカの歴史の教科書なら、私はずいぶんそれを見たことがある。ことに、小・中学校の歴史の教科書。アメリカ人のアジア理解、いや、誤解の根本はここにあると多くのアメリカの若者がいらだたしげに言った。いったい、世界歴史と称する本のなかで、アジアのことがどれだけ書いてあるのか。一人が私に言った。きみはワシントンのことを知っている。ジョージ・ワシントン。リンカーンのことも知っている。アブラハム・リンカーン。そうだな。おれは知っているな。私が言った。トム・ペインのこと。南北戦争のこと。大恐慌のこと。サッコ・バンゼッティ事件のこと。公民権のこと。そして、日本について、アジアについて、きみは何にも知らないな。そうだよ、何にも知らない。それに知っているとしたら――たとえば、アヘン戦争について、中国人がアヘンを欲しがったから起ったといわんばかりに、この教科書には書いてある。私が訊ねた。帝国主義についての記述はあるか。ある。彼――いらだたしげに語る多くのアメリカの若者の一人が答えた。しかし、それはイギリス帝国主義、フランス帝国主義、ロシア帝国主義、日本帝国主義。……つまり、アメリカ帝国主義ということばはないということかね。私が言い、彼はうなずき、それから、言った。いったい、「アメリカン・インペリアリズム」というのは日本語でどう言うのかね。私は教えた。それでは――彼はつづけた――「クラッシュ・アメリカン・インペリアリズム！」というのは？　私が答えると、彼は

立ち上り、さらにいらだたしげに室のなかを歩きまわりながら、大声で、日本語と英語の双方で、くり返した。叩きつぶせ、アメリカ帝国主義を！

そのときだったかも知れない。積み上げた歴史の教科書のなかで、それ、その旗を見たのは。

奇妙な旗だった。星条旗はたしかに星条旗なのだが、かんじんの星が十三しかなかった。星が碁盤の目のように並んでいるのではなくて、円形をかたちづくっていて、現在の星条旗を見なれた眼には、奇妙にさびしい。

いらだたしげに語りつづける彼は――たぶん、その彼というのは、「ＳＤＳ」（民主社会のための学生同盟）の親玉のカール・オグルスビーだったのだろう。それとも、同じ「ＳＤＳ」の前親玉、シカゴに住んで貧乏追放の計画にとりくんでいるトッド・ギトリンだったか。いや、アトランタの「ＳＮＣＣ」（学生非暴力行動調整委員会）のジョン・ルイス、ロバート・モーゼスのまっくろい顔がそこにあったのかも知れない。あるいは、「ティーチ・イン」の創始者の一人、ミシガン大学で人類学を教えるマーシャル・サリンズ、ベトナム帰りの政治学者、アデルファイ大学のスタンレイ・ミレイ、フェアレイ・ディッキンソン大学の黒人のロバート・ブラウンがいて、もちろん、そうした運動家、大学教授たちの背後には、彼らを支持する若者、大人たちがいて、そして、その大人たちのなかには、たとえば、ニューヨークの彼の書斎で静かに彼の戦争中の体験を語った（はじめ、兵役に志願。近視ではねられて、のち、ドイツに対する無差別爆撃をいきどおってパシフィストになり、牢屋に六ヵ月ほうり込まれた）詩人のロバート・ローウェル、あるいは、「自由の女神」を遠望できる彼のアパートのベランダで半ば酔っぱらいながら判りにくい早口の英語で第二次大戦のこと、ベトナムのことをややためらいがちに語っ

た小説家のノーマン・メイラーの顔が見えて、いや、もう一つ、ひょっとすると、ワシントンのアメリカ上院の議員会館（とでも言うのだろう。正確な名前は知らない）の奥まった静かな一室で、「ベトナム戦争は市民戦争だ」と落ちついた口調でくり返して語ったアラスカ選出の上院議員グルニングがひかえていて、もちろん、ローウェルやグルニングのような人は「クラッシュ・アメリカン・インペリアリズム！」などとは言わないだろう（メイラーはどうか？　彼なら、オグルスビーといっしょに、そんなふうに叫び出すかも知れない）、しかし、それにしても、あの奇妙な星条旗についてなら、彼らもまた、ひとこと、言うだろう。その旗は、一七七六年、アメリカ独立のときの星条旗だ、と。

そのとき、アメリカには、州は十三しかなかった。ということは、星条旗には星が十三しかなかったということだ。その十三の星の星条旗をかかげて、人々は独立を宣言し、イギリスとたたかった。

私が十三の星の星条旗をはっきり見たのは、博物館の薄くらがりのなかでも歴史の教科書のなかでもなくて、明るい陽光のなかで歴史のなかでのその存在を確認するように見たのは、二月のはじめのある土曜日、東海岸一帯をおそった大雪あけのよく晴れた寒い日、場所は、陽光にまっ白に輝くワシントンのホワイト・ハウスのまえの街路だった。兵隊の帽子をかぶったもうさして若くない一人の青年がそれを持っていて、となりに「United States 1776 Vietnam 1966」と大きく書いたプラカードをかついだ同じ年ごろの青年がいて、二人は彼らを年齢の最下限にした青年、中年、老年の男女のなかにいた。男女は黙って、輪をなして歩いている。彼らはさまざまなプラカードをかかげて歩いているのだが、彼らの言いたいことがあるとすれば、それは、その数字のプラカードがいちばんよく物語ってくれていただろう。つまり、一九六六年のベトナムは、一七七六年のアメリカと同じなのだ、と。

一七七六年のアメリカが独立をたたかいとる権利があったように、一九六六年のベトナムも同じものをもつのだ、と。

そんなデモなら、もう見あきている、聞きあきているとすくなからぬ数の人が言うだろう。デモをいくらくり返してみたところで、事態はそれでよくなったと言えるのか――私はその声をいたるところで、この長い旅を始めてから訪れたさまざまな場所で（たとえば、モスクワで、ローマで、ウイーンで、フランクフルトで、パリで、ロンドンで、ダブリンで、アイスランドのレイキャベックで、ニューヨークで、ワシントンで、アトランタで、ミシガンで、シカゴで、ボストンで、アテネで、ニュー・デリーで）耳にした。その声は、もちろん、次のより切実な叫びにつづく。それでは、次に何をすればよいのか。

私の会ったみんながそれを言った。ことをアメリカだけにかぎってみても、「ＳＤＳ」のオグルスビー、「ＮＣＣ」（全米調整委員会）のフランク・エムスパック、「ＷＳＰ」（婦人平和連盟）のダグマル・ウイルソン、クエーカーの平和団体「ＡＦＳＣ」（アメリカン・フレンズ奉仕団）のハニー・ノップ、「ＳＮＣＣ」のジョン・ルイス、「ＳＣＬＣ」（南部キリスト者指導者会議）のジェイムス・ベベル、あるいは、雑誌『リベレイション』による戦闘的パシフィスト、「ＣＮＶＡ」（非暴力行動委員会）のデイブ・デリンジャー、雑誌『ベト・リポート』の若い女編集者、キャロル・ブライトマン――そのなかには、ジョンソン大統領の「平和攻勢」にいっときはかない望みをかけた人もいた。意外なことに、それは、たとえば、Ｉ・Ｆ・ストーンだったが（彼は大統領の演説の口調のなかにそれをよみとろうとする）、カリフォルニア選出の下院議員ジョージ・ブラウンは、同じとき、悲観的な見通しを語っ

た。「『平和攻勢』が失敗したら」私はブラウンに訊ねた。「何がおこるだろう？」彼は暗い顔で、そっぽを向いて答えた。「もちろん、エスカレイションだな」、「どこまでエスカレイトすると思うか」、「いくらでもやるだろう。わがアメリカはそれだけの力をもっている。」

たしかに、その力のまえでは、ホワイト・ハウスまえのちっぽけなデモなど、デモのうちにさえ入らないだろう。十三の星の存在を、ホワイト・ハウスのうちの誰が認めたのか。その日、大統領は南ベトナム政権の親玉グエン・カオ・キに会うためのハワイ旅行の出発準備にいそがしく、すくなくともそういうことになっていて、本来ならデモ隊が会うべきホワイト・ハウスの一員（何トカ氏がそうなので、彼のことをデモ隊の指揮者が「プロテスト受領係（リシーバー）」とうまいことばを使って説明した。いつでも、デモ隊が来ると、その人物が応待することになっている）までが、準備にいそがしいという理由で会見を拒否した。デモ隊の指揮者（彼はニューヨークのあるカレッジの英語の先生だった）がホワイト・ハウスまえの小さな公園の銅像わきで（あれは誰の銅像だったか。それもまた「十三の星の星条旗」の英雄の一人ではなかったか）強い意志の力で怒りをしずめた声と口調でそんなふうに告げたとき、彼をかこむ三十人ほどの円陣のみんなのなかに笑声がわき上ったが、それはもちろん決して愉快な笑声ではない。

みんな――円陣の三十人は、彼――大統領に用事があるのだった。大統領にとって、あるいは、その「プロテスト受領係」にとっては、用事はむしろ簡単なことだったかも知れない。三十人は小さなスチール製の箱を用意していて、それを受け取りさえすればよい。箱のなかに何が入っているのか。爆弾が入っているのではない。まず、紙きれ。次いで、小さなメダルやリボン。

紙きれは、三十人の除隊証明書だった。あるいは、勲章につけられた勲記。メダルは勲章。リボンはたしか従軍のあかし、しるし――三十人は、それらを大統領に返そうとするのだった。三十人のほとんどが第二次大戦と朝鮮戦争の従軍者だが、紙きれのなかには、第一次大戦の除隊証明書もまじっている。

何のために、彼らはそれを返そうとするのか。三十人の一人、小説家のミシェル・グッドマンは語った。「ジョンソン大統領は、私たち在郷軍人の名において、ベトナム戦争を戦っていると述べた。この私たちは、今、こうしたまちがった戦争のダシに使われたくない。私たちの行動は、ジョンソン大統領の政策から自分を切り離し（ディソシエイト）、この戦争を私たちがいかなる意味においても支持していない、荷担していないことを示すためなのだ。」

さまざまな職業、さまざまな年齢、さまざまな信条がその一団のなかにあった。小説家。小説家志望の男。タクシーの運転手。建設工事の人夫。編集者。教師。鉄道員。「ブック・オブ・ザ・マンス・クラブ」の会長。詩人（二人いて、一人は女の詩人のデニス・レバトフ。彼女はグッドマンの夫人で、その資格で参加した）。除隊したての若者。朝鮮戦争、第二次大戦従軍の中年男、初老の男。老人は、もちろん、第一次大戦の従軍者なのだろう。女も、レバトフのような参加者の夫人以外にも二、三人いて、看護婦、あるいは、婦人部隊の旧隊員。

ある者は、あらゆる戦争に反対するパシフィストだった。そのとなりには、ファシズムを叩きつぶす戦争には自分は進んで参加した、しかし、この戦争にはとうてい荷担できないという「パール・ハーバー」の戦闘参加者もいた。朝鮮戦争は、アジアの住民に自由をもたらすための戦争だったと自分は

教えられた。しかし、ベトナム戦争はどうなのか。それは、いったい、何の役に立っているというのか——そう語ったのは、朝鮮戦争参加のもと中尉だった。

たいていの人が、除隊証明書、勲章、リボンをスチール製の箱に収めるとき、何かを言った。それはときには個人的な意志の表明であり、ジョンソン大統領への手紙であり、またときには、「こ(ジス)の汚(ダーティー)い戦争(ウォー)」と一言述べて立ち去る人もあった。女の人も強い口調で、ベトナム戦争から自分を切り離(ディソシエイト)す決意を語る——私は感動したと言ってもよい。雪が白く輝くなかで、人々のことばはたしかに冷たい宙空に鋭く突き刺さって行くような気がした。いや、感動したと言えば私をもっとも動かしたのは、無言のまま、除隊証明書のたぐいを箱におき去る人たちだったと言える。一人は鉄道員、というよりは、貨物列車に荷物を運び込む人夫だった。実際のところ、彼がスチール製の箱に除隊証明書と勲章をおさめた第一番目の人間であったのだが、彼はそのとき何も言わなかった。彼は大男で、見るからに労働者然とした男だったが、私の記憶に、その彼の顔と動作は焼きついて離れない。彼はデモの前々夜の会合にも出ていて、そのときも彼は何も言わなかった。それでいて、彼の大きな体、大きな顔、大きな動作、人々の話をきくときの思いつめたような表情、それらは私の記憶の中心にどっかりと腰を下しているような気がする。「草の根民主主義」の一つの標本だ、というような表現を私は使いたくない。そうしたありきたりの表現を拒否してしまうほど、彼の表情は思いつめていたと言える。その勲章というのは、第二次大戦のさなか、ドイツ軍陣地に単身乗り込んで味方の勝利をもたらしたということで得たものだが、彼はそれをスチール製の箱のなかに投げ入れるようにして入れた。勲章の勲記には、彼が上官から胸に勲章をつけてもらっているときの写真がそえられている。

それはたしかに彼の生涯のもっとも輝かしい瞬間であったにちがいない。その瞬間を、彼はスチール製の箱に投げ入れるようにして入れた。

もう一人、私の記憶に残っているのは、一人のやせた老人だった。彼は第一次大戦の除隊証明書と従軍リボンを黙って入れた。このような老人を街のどこで見かけられるかと言えば、たとえば、それは街角のドラッグストアのなかでではないか。彼はあたかもドラッグストアのカウンターの向うに立って客に黙ってコーヒーをさし出すときのように、事務的に、やや乱暴に、そして、それがまさに当然のことであるかのようにして除隊証明書とリボンを箱に入れた。

「十三の星の星条旗」を捧げてデモのなかにいた青年も無言組の一人だった。彼は朝鮮戦争の参加者だと言った。旗はもちろん自分のお手製で、私もひととき旗をもたせてもらった。旗は見かけよりも重く、ことにその日、風がきつく、まっすぐに保つためにはかなり力がいった。

大半がニューヨークの人たちで、彼らは、その日の朝、六時に貸切バスでニューヨークを発って来たのだった。実を言うと、私もその一人なのだが、五時間のバス旅行はそこにどこか同志愛的な空気が流れていて、こころよいものだった。しかし、もちろん、その空気はへんに気負いたったものではなかった。私は第二次大戦生き残りの詩人と並んで坐った。彼は主としてプロティノスについて語った。それと、エズラ・パウンド、ジェイムス・ジョイス、T・S・エリオットに会ったときの思い出話。大戦中は、彼はヨーロッパで歩兵の一兵卒だったのだという。

ワシントンでは、支援のデモ隊がホワイト・ハウスまえですでにデモをはじめていた。「NCC」と「WSP」のエムスパックとウイルソンが指揮者で、三百人ほどがホワイト・ハウスまえの街路をぐるぐ

るまわっている。その横に、ニューヨークから来た在郷軍人の一団がべつのデモ行進をかたちづくった。

この一団の名称は「ベトナム戦争をとめるための在郷軍人、予備兵」というのだが、その名が示すように、べつに組織ではない。これもまた――そう、これもまた運動だった。自発的な市民の運動。誰かがイニシアティブをとって、ビラをつくって、どこかにはって、口伝えにみんなが集まって来て――私たちが日本でやって来た「ベ平連」（「《ベトナムに平和を！》市民連合」）とそれはよく似ていた。あるいは、「わだつみ会」とも、その精神において似ていた。実際のところ、私が彼らとともにニューヨークからワシントンまで来たのは、「ベ平連」と「わだつみ会」からのメッセージを人々に伝えるためだった。そして、その代表として、デモ行進に参加する。

事実、私はデモ行進に参加し、のち、メッセージを短い演説のかたちで伝えた。「戦争をほんとうに戦った人たちは、今、ベトナムで行われている戦争を止めさせる権利と義務をもっていると、私は思う。かつて、私たち日本人は自らが正義だと信じるものの名において、戦い、侵略し、殺した。そして、今、私たちは、その正義がいかなるものであったか、よく知っている。……」人々は熱心に耳をかたむけているように見えた。おそらく、人々にとって、日本のそうした声をそうしたかたちできいたのははじめてのことであったにちがいない。私は話しながら、さまざまのことを考えていたが、そのさまざまなことは、結局のところ、戦争と平和の問題に集約されるだろう。いや、いつだって、すべてはそこまでさかのぼるのかも知れない。ことに、かつて死力をつくして戦ったアメリカの人々に対して何事かを訴えかけるとき、過去の記憶が激しくその問題に結びついて来るのだろう、昨（六五）年九月、ミシガン大学で行われたベトナム戦争反対の国際集会で話したときも、私はそのことを強く

感じた。聴衆は四千人ほどいて、私は一時間近く、主として「オキナワ」の問題について話したのだが、その一時間のあいだ、私の脳裏にまとわりついて離れなかったのは、アメリカ軍が撮影した沖縄戦の記録映画だった。一昨（六四）年のはじめ、私は沖縄でそれを見たのだが、その映画には、たとえば、日本兵がひそむ洞穴を火焔放射器で焼き払う場面があった。あるいは、武器をもたぬ市民の、老婆の無表情な表情。

ミシガン大学で演説したのは私をふくめて四人いたのだが、私のほかは、すべて、かつて私の国と戦った国の人たちだった。アメリカの劇作家のアーサー・ミラー。イギリスの運動の指導者ブロックウェイ。全米自動車労働組合のエミール・メイズイ。それと、私――私のまえには四千人の人間がいて、そのほとんどが私の国と戦った国の人間だった。

私自身の平和運動には、その事実はどこまでもつきまとって行くような気がする。いや、私の文学にも、それはつきまとって行くのだろう。昨（六五）年九月以来の長い旅は、私にそのことを再確認させたと言えるのかも知れない。それがつきまとうなら、私にできるただ一つのことは、そこから逃れないで、まともに、まっこうからつき合って行くこと以外にはないだろう。私は、今、つくづくとそう思う。

もちろん、戦争は平和と切り離して考えることはできないだろう。ことに、過去の大きな戦争のまえにひととき存在した平和――私はそれに思いをはせる。そのときも、平和なはずの世界のどこかで、いつも、何か戦争が起っていた。戦争がひっきりなしにどこかでつづいて起っていて、それでいて、世界は平和だった。すくなくとも、人々はそんなふうに考えていた。もちろん、そうした現実に眼を

つむっていられない人々もいた。その人々は声を出して叫んだ。しかし、彼らはあくまで少数者だった。

野間宏が書いた小説『わが塔はそこに立つ』を読まなかったならば、おそらく、私はこの長い旅に出かけなかったと思う。旅のごく一部分を除いて、私は誰に招かれたわけでもない。また、誰かに派遣されたわけでもない。私はただこの旅が必要だと考えただけのことだ。誰にとって？　――たぶん、まず、私自身にとって、と答えるのがもっともふさわしい答だろう。こうつけ加えてもよい。私が考える平和運動への私自身の参加に、この旅が必要だった、と。はた目にはどうであれ、これは私自身の「義務としての旅」なのだろう。すくなくとも私自身はそう考え、昨（六五）年九月のある日、日本を離れ半年たったこの六六年二月中旬の今日、まだ旅先、ニューヨークにいて、これ、この長い旅の記録を書きはじめている。

『わが塔はそこに立つ』を読んだとき、私の胸に強く迫って来た、というよりは、それ以来、私の心の底におもりのようにしてぶら下りはじめたいくつかの場面があった。それは、この小説の主人公である、悩める良心的インテリ、京都大学の仏文科の学生と、そのとき、フランスからやって来た若いフランス人講師をめぐる場面だった。フランス人講師は、彼に自分と同じものを見出したのだろう。ヒットラーの脅威について、ナチズム、ファシズムへの恐怖について、また、そうした問題に対してヨーロッパの知識人が何を考えどのように対処して行こうとしているかについて、主人公に語ろうとする。フランス人講師は、たとえそれが精神的なものにすぎないにしても、彼との結びつきを通して、ファシズムに反対する国際的連帯を求めていたのにちがいない。

しかし、主人公は、そのフランス人講師にむかって、彼の心の扉をかたく閉じる。彼に接近しよう

とするフランス人講師に、彼は言う。たとえば、「今、時間がない。」――もちろん、私には、主人公のその精神の動き、外界にむかって彼の世界を閉じ、ひとりになってものを考える、そうすることによって自分を確立しようとする彼の気持、動きは理解できるけれども、一方で、こういうことは言えはしないのか。そのとき、もし、彼がフランスの若い知性の接近を拒否しなかったならば、当時のヨーロッパ人が感じていたナチズム、ファシズムへの恐怖をより身近な問題としてとらえ、それによって、彼自身が直面していた日本のファシズムの脅威をより世界的なひろがりのなかで具体的にとらえ得たのではなかったのか。そして、今、もし、そのとき、日本の多くの良心的知識人がそのような道をとっていたなら、たとえばヨーロッパの「人民戦線」とのあいだに、有機的連帯が生れ、それによって、世界史の方向もいくぶんでもちがったものになっていはしなかったのか。『わが塔はそこに立つ』のなかにも、たしか、「人民戦線」のことをいくぶんのあこがれをこめて語る場面があった。たしかに、「人民戦線」は当時の日本人のあいだで「有名」だった。しかし、人々は、そのとき、それについて、ただ、いくぶんのあこがれをこめて話すことだけに終始したのではなかったろうか。「人民戦線」との現実的、具体的な結びつきを求めた人はほとんどいなかったにちがいない。そうした人が、現実的な力となり得るほどの数いたら、世界はどうなっていたか――もちろん、この私の考えは夢想にすぎない。しかし、十分にあり得た夢想であり、また、それゆえに、夢想として一笑にふするにはあまりにも口惜しく、また、重苦しいのだ。

そして、当時のヨーロッパの「人民戦線」は、そうした日本人の動きを夢にも知らなかった。いや、今だって、ほとんどすべての人が知らない。

イタリアでカルロ・レビと話したとき、私はその事実をもっとも痛切なかたちで感じた。カルロ・レビは、作家（『キリストはエボリに止まりぬ』の著者）、画家としてのほかに、長いレジスタンス運動の経歴の持主として知られる人だが、ローマの彼のアトリエで、彼はくり返してムッソリーニに対する彼の抵抗の体験を語った。「いくらかでも、日本にそのような動きがあったことを知っていましたか。」私はあるとき訊ねた。彼はかぶりをふった。そして、しばらく沈黙をつづけたあとで、つけ加えた。「それは、きみが言って、今、はじめて知ったことだ。」

「もし、そのとき、あなたがそれを知っていて、あなたが日本のそうした動きに手をさしのべていたとしたら。」私はひとり言のようにして言った。「世界は変っていたかも知れない。」彼はうなずき、私はつづけた。「そのとき、手を結んだのは、政府の側であって、人民の側ではなかった。もちろん、おぼえておいででしょう、イタリアと日本は、ドイツとともに枢軸国をかたちづくった。」

同じ意味のことを、私は、フランクフルトの大学教授の集会で言った。私の演説のあとで、一人の教授が握手を求めた。「今までそのことに気づかなかったことを私は恥じる。」集会に来ていたイギリス労働党の政治家が言った。「きみは、ヨーロッパ人の誰もが知らなかったことを言った。」フランスでも、イギリスでも、アメリカでも、ソ連でも私は同じことを機会あるたびに述べた。そして、このことばほど彼らに強く訴えかけたことばを、私は知らない。

私は夢想はするけれども、夢想家ではない。ここで言う夢想家とは、自らの夢想に酔うことができる（それは一種の才能で、そうした人たちがすぐれた仕事をすることを、私は否定しない）人のことだが、私は性格的にそうした型の人間ではない。私のしたかったことは——そう、それを次のように

まとめて言うことができるだろう。ベトナムの運動がはじまってから、世界中の運動の当事者がくり返して運動の国際連帯の重要性を説いて来たのだが、それは、いつでも、メッセージの交換や共同デモに終ってしまって、それ以上の積極的な結びつき、行動はない。そんなことは不可能なことだ、と言うのはやさしいし、私にもそれは判っていた。しかし、どこに限界があるのか。「現実主義者」（私は、ソ連で、ヨーロッパで、アメリカで、インドで、私の名前、「実」は「事実（ファクト）」と「真実（トゥルース）」を意味する。つまり、私は「レアリスト」で、この旅行は、一つには、「事実発見の旅行（ファクト・ファインディング・トリップ）」だと冗談を言った）の私は、まずその限界がどこにあるかを求め、それから、それをどのようにして押しひろげて行くかを考えたいと思ったのだ。

そして、たしかに、どこにでも、限界はあった。たとえば、ベトナムの問題はまぎれもなくアジアの問題であるのに、ヨーロッパ人とアメリカ人だけで問題が解決できるというような考え方――それはまぎれもなく運動の側にもあった。その根底にある、アジアに対する無知、情報の不足。例はいくらでもあげることができる。アメリカ、ヨーロッパの運動の指導者の多くが、「オキナワ」について無知、無理解を示した。アメリカの高名な指導者は、アメリカの対日、対アジア政策に大きな影響力をもっている駐日大使の名前さえ知らなかった。「これこそ、まさに、われわれの弱点の象徴だ。」彼は自分で苦笑して言った。あるいは、さらに、一つの決定的な事例をあげてもよい。

その決定的な事例というのは――フランスの大学教授組合の一員で日本にも名前がある程度知られた（彼はフランスの運動の強力な推進者だ）ソルボンヌの教授なのだが、「東京でデモをやると、どれくらいの人が集まるか」を訊ねた。私は、これこれ、と答え、それはそれですんだのだが、五分ほ

どたって、彼は何気ない口調で訊ねた。「ところで東京の人口はどれほどかね。パリより小さいことはたしかだが、二百万くらいですか。」東京の人口が「二百万」という理解の上で、デモの人数を知ることの無意味さかげんはここであらためて言うこともあるまい。

「ベ平連」の今後の運動の一つの目標は、東京で国際的な集会を開くことにあるのだが（この集会の計画は、六六年八月に開かれた「《ベトナムに平和を！》日米市民会議」として結実した）、その第一の理由は、ベトナム運動の当事者たちに、アジアの意見と行動を直接的なかたちで体得してもらうことにある。私は多くの人に言った。「私が求めているのは、あなたがたから『お説教』をきくことではない。むしろ、それはあなたがたに、事実の教育の機会をあたえるためだ。」

無知、情報の不足は、アジアについてだけではなかった。イタリア人はフランス人のやっていることについてたしかではなかった。フランス人も同じ。そして、飛行機で一時間でパリからロンドンに着いたとき、はじめて会ったイギリスの運動の当事者は、まず、言った。「フランス人は何をやっていますか。こちらには、さっぱり判らないのです。」アメリカ人は、もちろん、ヨーロッパの運動の現状について多くを知らなかった。ベトナム運動の専門誌である『ベト・リポート』に、私はヨーロッパの運動の指導者たちの名前と住所を教えた。

無知、情報の不足は、他国の運動に対して、甘い幻影を抱くことになる。西ドイツの人たちは、ここでは運動は駄目です、フランスが強いと言った。フランス人は、絶望的な表情で、イギリスの運動がヨーロッパの救いであるようなことを言った。イギリス人はアメリカの運動こそが、と言い、そして、アメリカ人は、フランスと日本の運動に期待している、それを唯一の救いであるほどに期待して

いるのだと言った。

しかし、そうかと言って、私は決して絶望しているわけではない。多くの限界とともに、その限界を拡大する努力、あるいは、拡大できるだけの素地を、私は世界のあちこちで認めた。たとえば、もっとも重要な事実として、アメリカの運動を実際におし進めている若者たち（彼らはおどろくほど若い。カール・オグルスビーの三十歳は例外として、エムスパック、ギトリン、ジョン・ルイスたちは、二十歳から二十五歳のあいだにいる）の対アジア・アフリカ観、対共産主義・社会主義観、そして、より根本的には対アメリカ観をあげることができる。

まず、彼らの対アジア・アフリカ観について考えてみよう。彼らがものごころついたとき、アジア・アフリカの諸国はすでに独立していた。あるいは、日本もすでに一つの独自の自分自身の声をもつ国として存在していた。ということは、彼らが、アジア・アフリカ諸国あるいは日本が自分自身の意志をもち、行動することを、当然のこととしているということだろう。何年かまえ、アメリカに留学生として滞在していたとき、私をいらだたせたのは、アジア・アフリカについて、あるいは日本について人々が語るときの保護者めいた口調だった。それはアジア・アフリカ研究者のなかに顕著に見られたことだったが、左翼知識人の思考、談話のなかにもまぎれもなくそれはあった。いや、今だって、それは同じなのだろう。年輩の人に会うとき、ことにアジア・アフリカ研究者や、東京に駐在している外国の特派員たちに会うとき、私は強くその保護者めいた口調を感じとってしまうのだが、それは、ベトナムの運動に直接、間接に関係している人たちのなかにさえあることは否めない事実だろう。しかし、それは、おおむね、年上の人たちだった。運動の主力をなしている若者たちには、そう

した口調は大きく影をひそめたと言ってよいだろう。あくまで、彼らは、対等の基盤の上で、アジア・アフリカの問題を語ろうとする。いや、ある意味では、アジア・アフリカは彼らの先輩であるのかも知れない。長い権力への抗争の歴史において、あるいは、急進的なデモの方法において――多くの人が、たとえば、かつての「ゼンガクレン」をあこがれの口調で語った。

もちろん、こうしたことは、ほんの出発点にすぎないのにちがいない。まだまだ、彼らはアジア・アフリカについて、おどろくほど無知なのだ。しかし――私はくり返して思った――これは、すくなくともこれまでになかった、すぐれた出発点ではないのか。この出発点に立つとき、はじめて、人は、アジア・アフリカ人の身になってものを考えることができるだろう。私自身、アジアについて、日本について、彼らに親身にものを教えてやりたいものだと思った。それは六年前、アジア、あるいは日本研究者に接したとき、私が決して感じなかった感覚だった。

対共産主義・社会主義観についてはどうか。六年前、人々は、「私は反共だが……」という前おきをおいて、ソ連の政策を擁護し、アメリカを批判した。今日、運動のなかの若い人たちの多くが、そうした前おきをおかないで、ソ連について、中国について、あるいはアメリカについて語ろうとする。いや、アメリカの運動は、公民権運動をふくめて、アメリカという資本主義社会の構造を根底から問題にするところまで来てしまっているのだろう。多くが、この社会は根本的変革を必要としている、社会の根本的変革がないかぎり、ベトナムの問題は解決しない、黒人の地位の向上はない、と私にむかって説いた。きみは社会主義的な変革のことを言っているのか――私がそう言うと、彼らは、もちろん、と答えた。それ以外に方法はない。ただ、どんなふうにして、それを実現するのか、私たちは

まだ答を知らない――多くの若者がそんなふうに結論した。

二つを結びつけて考えてみよう。それは、必然的に、アジア・アフリカにおいて、社会主義はあたりまえだ、それ以外に方法はない、あるいは革命は必要だ、という考え方にもなる。もちろん、こうした彼らの考え方にひそむ甘い幻影を指摘することは容易だろう。彼らは、たとえば、アジア・アフリカの貧困を、彼らの貧困の概念（「ＳＤＳ」がシカゴで実験的に行なっている貧乏追放活動の対象である「貧窮白人（プーア・ホワイト）」は、月収四百ドル以下の人たちだ）で理解してしまいがちだ。私は多くの若者と話していてその危険を感じたが、それにしてもそうした運動を嘲笑する、アジアについてきいたふうな口をきく（四百ドルで何が貧乏だって、インドへ行ってみたまえ――こうしたことばの論理的帰結は、だから、「貧窮白人（プーア・ホワイト）」よ、がまんしろ、だろう）やや年配の人たちよりも、私は前者のナイーブな若者たちにより多くの共感と希望をもった。そして、私はくり返す。これは一つの得がたい出発点なのだ、と。正直に言って、六年前のアメリカで、私は手がかりをもたなかった。今、私はそれをはっきりと手にしているような気がする。

そして、もう一つ、私は有力な手がかりとして、自国の悪を率直に認めようとするアメリカ人の数が、六年前と比べて比較にならないほど増えて来ている事実をあげる。それはもちろん若い人に多いが、年配の人たちのなかにも、その数は増加しつつある。六年前、人々は、自国の悪を言うとき、必ず、その悪に平衡をとるように、反対陣営の悪をあげた。つまり、アメリカの悪が、何ものもそれに平衡をとらせるそれを対置させるようにして。しかし、今日では、アメリカの悪が、何ものもそれに平衡をとらせるにはあまりにも大きすぎるためだろう。私はかつてのそうした悪の平衡論者の多くがそのような態度

をまったく放棄してしまっているのを見た。さらに、これは若い人々に数多く見られることだが、現在の悪から過去の諸悪――アメリカがアジアに、両アメリカに対して行なった悪の数々からアメリカのぞくする西洋の悪そのものまで問題にして行こうとする。いやこのことはアメリカの若者ばかりではないだろう。私は世界の各地で、自国の悪、あるいは、自分のぞくする西洋そのものの悪まで自分の問題として考えて行こうとする若者に出会った。そうした若者の数は次第にふえて行きつつあるように見える。

私は世界の運動の現状について、悲観も楽観もしていない。いや、旅を始めたときも、悲観的な予想も楽観的な予想もたてなかった。半年旅をして歩いた今、私は、ある意味では、世界の運動の現状は出発にあたって私が予想した通りのものであると思う。限界があり、その限界を拡大しようとする動きと素地があり、しかし、いぜんとして、限界はあり――私が出発にさいして、期待し、そして、今、ある程度確実に体得できたと自分で考えることができるのは、その限界、限界を拡大する動き、素地のたしかなありどころだろう。私はこれから、それについて書いて行きたいと思う。そのたしかなありどころの上に立ってはじめて、人は、自分が何ができるか、何をなすべきか、をつかみとることができるのだろう。人は――いや、私自身が。つまり、これから私が書くことは、私自身の独白であり、対話なのだろう。

昨（六五）年九月、私は、まず、アメリカに行き、ミシガン大学で行われたベトナム戦争反対の国際集会に参加した。のち、すぐモスクワに行き、それから、イタリア、オーストリア、西ドイツ、フ

ランス、イギリスを経て、また、アメリカに戻り、アメリカのあちこちを歩いた今、ニューヨークでこれを書きはじめている。

昨年五月に私はカリフォルニア大学の「ベトナム・デイ・コミティ」の人たちと電話で連絡して、「ベ平連」主催の共同のデモを行なった。そのあとで、谷川雁が、そんな電々公社の社員なら誰でもできることをやって有頂天になるな、とどこかで書いたことがある。さしずめ、この旅など、谷川流の言い方を借りれば、航空会社の社員なら誰でもできることだろう。実際、私はあちこちで、彼のことばをそんなふうに自分でおきかえてみて笑った。モスクワの作家同盟のえらい人が、私に親身に忠告した、「あなたは文学者だ。この国の作家のようにものを書くことに専念しなければならない。平和運動は、ほかの誰かがやってくれる。」モスクワで友人になったソ連の詩人エフトシェンコも同じことを私に言った。「『分業』が日本ではまだ十分に確立されていないのでね。」私は答え、笑ったが、それはいささか自分ながらウンザリする笑いであった。

II

切り離し、荷担する

カール・オグルスビーは奇妙な実験のことについて語った。カール・オグルスビーは、「ＳＤＳ」（民主社会のための学生同盟）の委員長で六四年の八月、「ベ平連」が主催した徹夜討論集会（「戦争と平和を考える」。その一部として、ベトナム戦争についての「ティーチ・イン」があった。「ティーチ・イン」は知識人と政治家のあいだの討論というかたちで行われた）に来て、自民党からの出席者の「アメリカ人はお人よしだが、ただ少し思慮の足りないところがあって」云々の発言に対して、「そのお人よしのアメリカ人が南ベトナムで何をしているのか、彼らがナパーム弾を落し、シガレット・ライターで農家に火をつけているのではないか。私は南ベトナムでつぶさにそれを見て来たのだ」という意味のことを述べて、自民党出席者の安易な発言をもっとも痛烈に批判した男なのだが、今年三十歳になる劇作家で、つい一、二年前までは「ベンディックス」という「ランド・コーポレイション」まがいの軍事情報サービスにつとめて月給千ドルをもらい、彼の言い方を借りれば、「典型的に豊かなアメリカの中産階級の生活を無批判に送っていて」、それが、ベトナム戦争激化とともにそうした自分に疑問を感じ始めてその職をほうり出し、「ＳＤＳ」に入りもちろん無給で働き、やがて選ばれて委員長となり、本来なら委員長は月給三百五十ドルのはずなのだが、そこは平和運動にありがちなことで月給はいつもおくれ、ついには、まったく入らず、さまざまなアルバイト（たとえば、どこかの会社のカード作製）で辛うじて生活を維持し（彼の家族構成――夫人と二人の女の子と一人の男の子。男の子はまだほんの赤ん坊だ）、しかし、全米を精力的にとびまわって演説し、組織をつくり、デモ行進の先頭に立ち、それでいて、自分のやっていることにいったい意味があるのか、自分はこんなこ

とをしているより退いて劇を書くべきではないか、そのほうがまだしも意味があるのではないか、と自問し懐疑し、そのせいだろう、彼のアゴヒゲを生やしたビートニックまがいの顔にはたとえば私がモスクワで幾人も会った若い「平和官僚」の表情には見られない陰影があって、それはたぶん私の表情にもあるにちがいない、その陰影を通して彼と私はおたがいのなかに自分の分身を見出していて、分身を見ることでおたがいの位置を確認しあい、共鳴し、共感し、あるいは、ウンザリし、腹を立て――そのオグルスビーが私にその実験について語ったのだが、それは、つまり、分身が分身にむかって語りかけたということだろう。語ったのは彼のミシガン州アン・アーバーの家の屋根裏の一室で、山と積み上げた本や書類のなかで彼は徹夜で演説の原稿を書いていて、私はそばに横になっていて、夜と言うよりはもう朝と言うべき時刻だったかと思う、彼はふいにタイプ・ライターの手を止めると、その実験のことを唐突に語りはじめた。

エール大学の心理学者が行なった実験なのだという。たしかに奇妙な実験だった。被実験者はすべて男だが、社会のあらゆる階層、職業、年齢から「無作為抽出（アト・ランダム）」に選ばれて来ていた。実験の目的は、「体罰と学習」――いや、これは被実験者がそうだと教え込まれて来た目的であって、ほんとうの目的は別のところにある。

この「体罰と学習」の実験において、被実験者は、すべて、「教師」になる。というよりは、被実験者自身が実験者になる。彼らのいる実験室の隣室には「生徒」がいて、さまざまなクイズめいた問題をあたえられる。「生徒」がまちがった解答を出すと、「教師」は彼に「体罰」を加える。そうした「体罰」が「学習」にいかに寄与するか、あるいは、しないか――実験の目的はそこにあると、おまえは

そういう実験をしているのだぞと被実験者は教え込まれている。

「体罰」はどのようにして加えるのか。被実験者のまえには電気のスイッチが並んでいて、それを入れると、「生徒」には電気ショックが加わる。十ボルトくらいからはじまって、三百ボルト、四百ボルト――十ボルトの電気ショックなら、そんなものはほとんど問題にならないだろう。百ボルトとなるとたしかにショックだが、それだってまだまだたいしたことはない。それが三百ボルトとなると、いや、四百ボルトとなると、下手をすると死を招くかも知れない。ことに、「生徒」に心臓の故障があったりすると――被実験者はまえもってショックの種類の詳細について教えられている。まず、どのスイッチが十ボルトのであるか、三百ボルト、四百ボルトのであるか。ついで、十ボルトのショックがどんなショックであり、三百ボルト、四百ボルトのショックが「生徒」の体にどのような効果、と言うよりは危険をもたらすか――被実験者はそのことを十分にわきまえている。「生徒」は、終始、隣室にいて、彼の姿は見えない。いや、ほんとうのことを言うと、隣室に「生徒」などいないのだ。「生徒」の解答、まちがった解答は、ほんとうの実験者（つまり、エール大学の心理学者）の手によって、適宜、「教師」、つまり、被実験者にあたえられる。そして、被実験者はそれによって「生徒」に「体罰」、――四百ボルトに至るまでの電気ショックを加える。

電気ショックのスイッチを入れると、「教師」の耳に「生徒」の反応が入って来る。実はそれはテープにとられた声であって、あるときには悲鳴であり、あるときには、後生だから止してくれ、おれは心臓が弱いのだ、という懇願であり、必死に壁を叩く音であり、ついには、四百ボルトを入れると、死の静寂、沈黙があとにつづく。こうした声、物音は実際の「生徒」の反応だと「教師」に信じ込ま

せるほど巧妙につくられているのだが、さて、「教師」、被実験者のうちの幾人が四百ボルトのスイッチにまで手をのばすか――そのことが、実を言うと、エール大学の心理学者の奇妙な実験のほんとうの目的だった。つまり、いったい、ふつうの人間がどこまで残忍になり得るのか。

「生徒」の反応とともに、「教師」には逆にさまざまな激励が加えられる。「それくらいのショックなら大丈夫だ」とか、「あいつはウソを言っているのだ。かまわず、やれ」とか、「これは科学の進歩のためにぜひ必要なことだ」とか、あるいは、「何がおこっても、エール大学のわれわれが責任をとる。」エール大学という名前自体が、人々の心に権威と安心感をあたえたにちがいない（この一月――六六年――に北ベトナムへ出かけた三人のアメリカ人の一人、スタットン・リンドはエール大学の助教授だった。三人のベトナム行がジャーナリズムにはなばなしくとり上げられ、人々のあいだでかなりな支持を受けたのには、リンドの「エール大学助教授」という地位が大きくものをいっているのは否めない事実だろう。アメリカ人の多くがそのことを指摘した）。あるいは、「心理学」というもっともらしい名前――つまり、人間、ふつうの人間が、そうしたさまざまな正当化をあたえられたとき、どれほどまでに残忍な行為をなすことができるか。

エール大学の心理学者は、実験に先立って、アメリカの高名な心理学の専門家の意見を求めた。それによると、四百ボルトにまで進む者は気狂いだけであって、全体のたかだか十パーセントぐらいにしかならないだろう――実験の結果は、六十パーセント以上が四百ボルトにまで手をのばした。「六十パーセントというと、それは、もう気狂いだけというわけにいかない。」私が言った。

「その通り。ふつうの人間が四百ボルトにまで平気で進み得るということだ。」オグルスビーが言った。

「ことに相手の姿は見えない。」

「見えていても、同じかも知れない。」私が言った。そのあと、彼と私はしばらく黙り、私は、沈黙のなかで、これまでに私が聞き知った二つの事実について、そうした事実のもつ重みについて考えていた。一つは、私が当事者の一人に出会ったことがある事件だったが、九州大学医学部の医師たちが行なった生体解剖事件。あれも、ふつうの人間、ふつうの知識人が行なった行為だった。そして、その行為は彼らの眼に見えていた。

もう一つの事実――広島、長崎に原爆を落した連中は、戦後まもないころ、広島、長崎を訪れたことがあるという。「ヒロシマ」、「ナガサキ」を目撃したあとで、精神に異常を来たしたのは、たしか、ただ一人だった。

もちろん、こうした事実は枚挙にいとまがないだろう。「一九六〇年四月のある日、南ベトナムの小さな田舎町で、以下の出来事は起った」と、『ベト・リポート』の編集者マーティン・ニコラスは、ベトナム戦争に果すミシガン州立大学（ミシガン大学ではない。念のため）のかくれもない役割にふれて書く（「教授、警官、農民」、『ベト・リポート』二月号）。「あるアメリカ人教授がその地域の秘密警察の長を彼の本部でインタビューしたのだが、そのとき（教授の報告によると）『すみっこに、ボロボロの服を着た二十歳ばかりの農民がマットにくるまってころがっていた。彼の足には足かせがはめられていて、彼の顔の左半分はふくれ上り、眼と頬はひどい打撲傷を受けていた。』……」あきらかに、若者は拷問を受けたのだが、「アメリカ政府とサイゴン政府との契約のもとに基礎研究（ベイシック・リサーチ）を行なっている教授は、そうした事実を記しただけで、農民についてそれ以上の疑問を発しようとしな

かった。」つまり、「秘密警察の長も教授も、農民がそうした状態でそこにいることに心を乱されはしなかったし、また、それを異様なことだとも思わなかった。」もう少しくわしく調べてみると、さらに奇妙な事実が判る。「訊問室も農民の足の足かせをふくむ秘密警察の長の装備も、あるアメリカの大学――つまり、その教授にサラリーを払っている同じ大学からの金によってつくられ、供給されたものだ。教授、警官、農民の三者は、大学が企図した通りの役割をもって、ここに集まって来ている。……秘密警察の長にとっては、農民から情報をしぼりとるのが彼の役割であるなら、教授にとっては、いくつかの質問をし、そして、他のことは一切訊かないのが彼の役割であって、彼はただ答を紙の上に書き記して行くだけで、彼の専門の領域の外のことについては何らの意見も言わない、そして、その足かせは、他の附属品とともに、規則的なスケジュールのもとに大学から警察に供給されたものである。ここには、それについて、異状なことがらは何一つない。」つまり、その教授は、こうした事件は、「まったく話すに値しないことだと考えている。」

しかし、このようなことはその教授だけだろうか。それは――と、マーティン・ニコラスは鋭い疑問を投げかける――「正常で」、立派な地位をもった大学教授、大学のなかに、いや、アメリカ外交そのもののなかに見出されることではないのか。つまり、このような「異状な正常」こそ、今日のアメリカの社会の「エスタブリッシュメント」の特質ではないのか。

それが「エスタブリッシュメント」の特質であるなら、多くの心あるアメリカ人、ことに、若い敏感な精神が「エスタブリッシュメント」の外に、それとたたかうかたちで、いわば、「正常な異状」を求めようとするのは、むしろ、当然だろう。

つづきは製品版でお読みください。